

第3章 先島の14世紀から16世紀の遺跡について

大瀨 永寛

はじめに

先島は、沖縄諸島の南に広がる宮古諸島・八重山諸島を総称した名称で、先史時代においては縄文・弥生文化の波及が見られず、南方的な独特の文化が展開してきた地域で、先島文化圏とも称されている（大瀨永寛 1999）。

先史時代からの独特の文化は、12世紀頃よりその様相は一変する。これまで海への依存が高かった狩猟・採集の社会から、農耕の開始、家畜の使用、交易の開始など大きな転機を迎える。その要因は長崎産の滑石製石鍋や徳之島産のカムイヤキ（須恵器）などの出土より九州方面から南下してきた人々が契機となったと考えられ、これは沖縄諸島のグスク文化と同一の展開と考えられている。14世紀後半頃よりグスク文化（高宮 1967）は、明国との朝貢・進貢貿易を開始する。一方、宮古・八重山は、海禁政策を犯して来島した民間の中国福建沿岸海商らと密貿易・私貿易を頻繁に行い独自の文化を築いていったと考えられる（大瀨永寛 2008）。

先島では、12世紀頃から16世紀にかけ大きく変移したこの時代をスク時代と称している。この頃の遺跡は「〇〇スク」と称される遺跡が多く、また、石垣島や新城島（上地島）・鳩間島には屋敷囲の性格の強い連廓野面石積遺構の残る遺跡は「ブスヌヤー・ブシンヤー」、「ブスヌヤマ」、「ブスヌヤシキ」などとも呼ばれている。また、大和墓と称される地も石垣島や与那国島に残っている。このような14世紀から17世紀中葉にかけては多くの外来文物を受容した時代と考えられる。中国では明代（1368-1643）に相当する時期である。

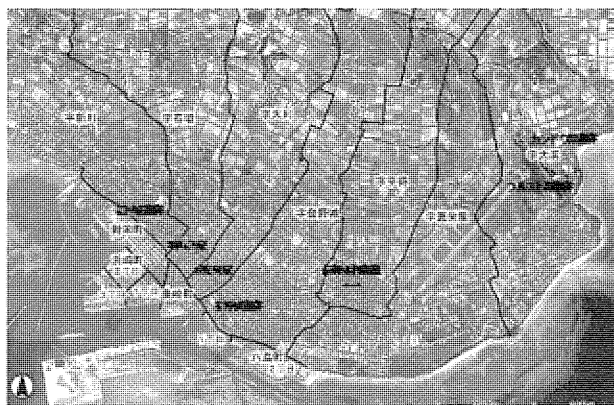
今回ここでは、先史時代より続いてきた南方的な文化が大きく変移した12世紀以降の中でも、特に外来文物を大量に受容した14世紀から16世紀頃に焦点を絞り、遺跡の数・立地、遺物の特徴、遺構の内容についてまとめ、その様相について触れたい。

1. 14世紀から16世紀頃の八重山諸島内の遺跡数と立地

標記年代の中でも、15世紀から16世紀頃に比定される遺跡の数は14世紀以前に比べ遥かに増加する点に特色がある。その立地も海岸低地砂丘や海岸近くの展望の利く小高い丘、緩やかな傾斜地、丘陵の先端部、海へ張り出した岬など多様な展開が認められる。以下、代表的な遺跡を紹介する。

①海岸低地砂丘上の遺跡

石垣島の南側市街地東西1kmの背後に琉球石灰岩の段丘を控えた標高3～4m前後の砂丘地に喜田盛遺跡、平川貝塚、石垣貝塚、登野城遺跡の4遺跡が点在する（石垣教委 1993a / 1993b / 2004）。時代は、何れも14世紀から近世で、旺盛期は14世紀から16世紀に比定される。その内、登野城は方言で「トゥヌスク」と称され「スク」地名の付く遺跡の一つである。



市街地周辺の明代の遺跡

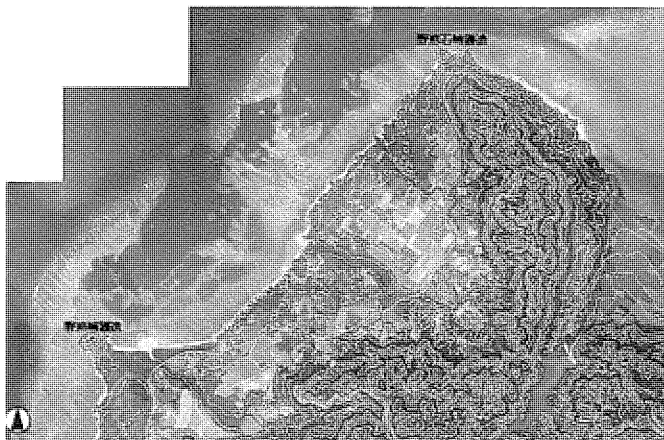
また、石垣島の南側市街地より東側の字大浜にあるウフスク村遺跡（カンドゥ原遺跡）も後方に琉球石灰の段丘を控えた砂丘上に立地する（註1）。遺跡後方の崖沿いは、湧水が豊富でウラバルカーラ（ウラバル川）が流れ、その入り江は俗称「船着（フナツク）」と呼称されている（沖縄県教委 1983 / 1984）。また、前方には裾礁（リーフ）が広がっている。同遺跡も「スク」地名の付く遺跡の一つである（大濱永亘 1999）。時代は13世紀から18世紀である。

②展望の利く小高い丘や岬上の遺跡

小高い丘や岬上の遺跡は、周囲への展望の利くのが特徴で、とりわけ海への眺望が良い点は注目される。何れもその周辺より遺物が採集されている。しかし、生活の場としては不向きとなっている。

野底石崎遺跡や野底崎遺跡は、石垣島の北西部に位置し、野底は方言で「ヌスク」と称され「スク」の地名が付く遺跡の一つである。何れも海へ突き出した岬となり、周囲への展望が良い。その頂上や周辺から陶磁器や土器が出土・採集されている。野底石崎遺跡では頂部に野面積の石積を廻らし、平場を形成しているが、その空間は狭く住居としては不向きな場所となっている。また、野底崎遺跡では、裾野の石灰岩上に墓地、砂丘地には包含層が確認されている。小規模な確認調査では、ピットも確認されている（註2）。裾野の砂丘地に集落を構え岬は遠見台的に利用したと考えられる。時代は15世紀から16世紀頃である。

川平貝塚と川平火番岡遺跡は川平湾を望む小高い丘に立地し、頂上や斜面より遺物が採集されている。これらの遺跡も頂部は平坦であるが、その空間は狭く住居としては不向きである。また、川平火番岡遺跡は1644年に、はじめて烽火の場所として制定された地のひとつとされる（沖縄県教委 1990）。これらも遺跡以前より遠見台や狼煙台的な役割を果たしていたと考えられる。時代は前者が14世紀から16世紀で、後者が16世紀から近世である。



野底崎遺跡・野底石崎遺跡の位置



仲筋貝塚と川平火番盛遺跡の位置

③琉球石灰岩上および丘陵の先端部

フルスト原遺跡は前述のウフスク村遺跡（カンドゥ原遺跡）の後方の南北に走る標高23mの琉球石灰岩上に位置する。東側は自然の障壁となっており、宮良湾が一望できる。また東側の崖下は湧水が豊富である。遺跡内には、広いところで幅2m前後の石垣が細胞状に15基張り巡っている（石垣市教委 1977）。13世紀から16世紀にかけての集落跡である。集落としての利用はほぼ16世紀までで、それ以降は、墓や拝所として利用されている。近接するウフスク村跡とは15世紀から16世紀にかけ同時期に存在したと考えられるが、その

関係は不明である。

石垣島の北西部に所在する富野遺跡は海へ突き出た丘陵の先端に位置する。西側には海を一望でき絶景の箇所となっている。また、丘陵上には石垣が巡っている。14世紀から16世紀の集落跡である。同遺跡も集落としての利用は16世紀までである。

④緩やかな傾斜地

石垣島の西部の川平湾を望む標高40mの緩やかな傾斜地に仲筋貝塚は所在する。14世紀から16世紀ころの地点貝塚であり、小さな村落を形成していたと思われる（仲筋貝塚発掘調査団 1981）。16世紀以降は忽然と居住地としての利用が放棄される。

小結

以上、14世紀から16世紀にかけて遺跡数は増加する。遺跡の立地は、12世紀以前まで海岸低地砂丘に限定され、とくに主要利器である石器の石材地である西表島や石垣島に集中していたのに対し、12世紀以降は、農耕に便利な内陸部への進出がはじめて認められた。13世紀後半頃より、中国の元私船（ジャンク船）の南島への北進ルートの一つとして、各遺跡の交易環境の整備が八重山諸島の島々に展開された。14世紀から16世紀にかけ海岸低地砂丘や海岸近くの展望の利く小高い丘、緩やかな傾斜地、丘陵の先端部、海へ張り出した岬などを中心に多様な展開が八重山諸島内の至る場所に認められる。

共通した点として、遺跡からは海を見渡せ、展望の利く場所が多い点があげられ、外来者への意識の高さを感じられる。しかし、このような多種にわたる立地の展開は16世紀頃を境とし忽然と利用が破棄される遺跡が目立つ。

2. 14世紀から16世紀頃の遺物の特徴

外来品は、12世紀から13世紀後半頃まで主流遺物の一つであったカムイヤキは忽然と皆無の状態になり、14世紀から16世紀は、前述の通り遺跡数が増加し、その立地も多様な状況が窺える。遺物は中国産の貿易陶磁器や、在地品もこれまでにないほど豊富で、その最盛期を迎える。ここでは在地品と外来品に分け、その特徴を紹介したい。

①在地品

膨大な量持ち込まれた外来文物とともに、在地品の種類も豊富である。在地の遺物には、土器、貝製品、骨製品があり、さらには食料残滓なども含まれる。

A. 土器

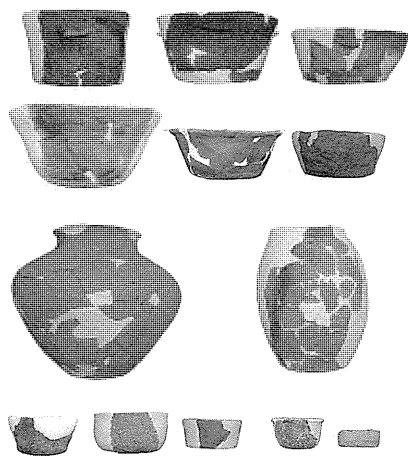
同時期の土器の発見は古く、鳥居龍造により川平貝塚の発掘調査が実施された1904年に遡る（鳥居1905）。その頃より、外耳の付くのが特徴で、本邦には類例がほとんどなく南方的とされている（鳥居1905）。一方、先島においての土器作りの開始とその使用は下田原式土器に代表されるとおり約4000年前に遡る。しかし、その後は3000年前より12世紀頃までの間、土器の使用は皆無に近い。

それが、12世紀以降、長崎産の滑石製石鍋や土師器、徳之島産のカムイヤキ（須恵器）など外来品の影響を受け、これまで土器製作が行われていなかったとは思えないほど精巧な土器を作り上げる。それは外来品そのものの影響のみだけではなく技術的な導入もあったと考えられる。12世紀以降、新たに開始された土器

の使用は、その後、14世紀から16世紀頃にかけて最盛期を迎える。その頃の土器は『中森式土器』と呼ばれ、外耳が付くのが特徴で、鍋形土器を中心に壺形土器も認められる。最もポピュラーな鍋形土器は、底は丸底で、丸みのある胴部から口縁部で肥厚し、大きく外反する。口縁部の直下には外耳が貼付けられる。調整は口縁部下2cm程の部位より刷毛目や削りを施し、丸みのある胴部から底を作りあげる。また、サイズは口径が30cm以上と大きい。この手の土器は、先島で確認されている鉄鍋と形態的に類似する。

一方、壺型の土器は小型と大型の2種認められる。その一つは、肩が張り口縁部はやや外反する。形状はどっしりとし、寸胴型である。鍋形土器に比し丁寧に整形される。14世紀以降より、出土頻度が増す。カムイヤキの供給量が低下したことで逆比例して、製作が増加すると推測される。カムイヤキの壺と形態的に類似点が多い。もう一つは、量的には少ないが、独特の有孔の耳を貼付けた小形の壺型土器がある。肩部には縦横の有孔の耳が付く。これらは形状的に褐釉陶器の壺に類似点が多い。模倣と考えられる。

その他、器種が豊富なことが14世紀から16世紀の土器の特徴である。小形の特殊土器には、鉢形・碗形・皿形・小杯などがあり、前後のどの時期に比べても豊富である。



登野城遺跡出土復元中森式土器



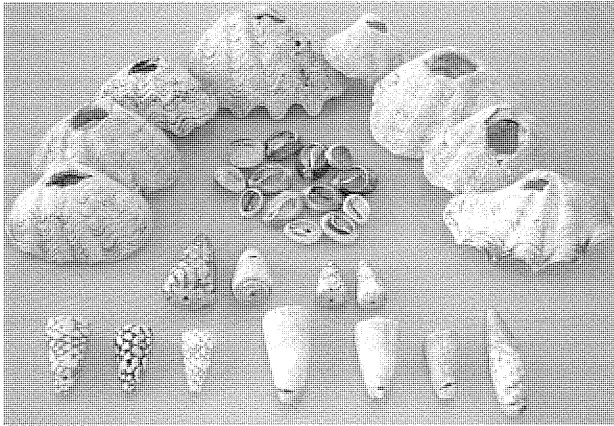
登野城遺跡出土宮古式土器

B. 貝製品

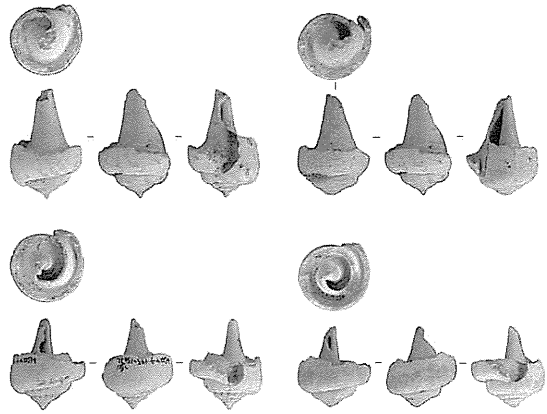
続いて貝製品が豊富なことも注目される。12世紀以前はシャコガイを利用した斧がその中心となる道具であったが、12世紀以降は、漁労具などの実用品が中心となり、装飾品や遊具も存在する。漁労具にはシャコガイ科などの二枚貝に孔を穿った二枚貝有孔製品やタカラガイ科の上部をカットしたタカラガイ科製品があり、何れも魚網錘である。一方、イモガイ科の貝殻の模様を利用し、孔を殻頂や殻口付近に穿ったイモガイ科有孔製品がある。これはタコ採りの際の疑似餌である。この3種は比較的近代まで使用されていた。

その他、貝の真珠層の鋭利な特性を生かしたクロチョウガイ製の刃器やヤコウガイ製の貝匙などもある。遊具としてはマガキガイなどの巻貝を利用し、打割を加え独楽状に整えた独楽状製品がある。これも近代まで使用されていた。その他、イモガイ科の殻頂を円盤状に切り取り、精巧に研磨を施し、孔を穿った装飾品がある。これらは12世紀以前の遺跡からの出土があり、先史時代から引き継がれたものと考えられる。

以上、貝製品は、漁労具が多く、先史時代と同様、海への依存の高さも窺える。食料残渣を見てもリーフ内の魚骨が主流となっている。



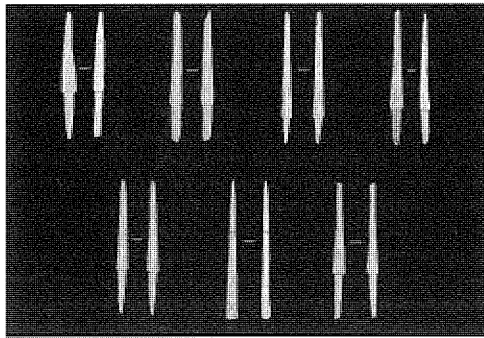
登野城遺跡出土貝製品（漁労具）



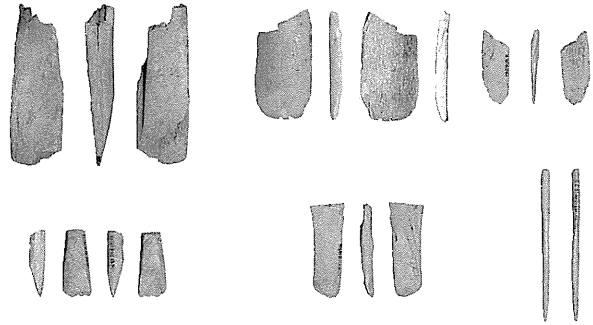
登野城遺跡出土貝製品（独楽状遊具）

C. 骨製品

骨製品の中心も実用品である。骨製品は主に尖頭器と篋状利器の2種が中心となるが、その他、骨製の簪がある。骨製尖頭器は、主にウシの長官骨を利用し、茎を有し尖頭器状に整えたもので、沖縄本島での出土は稀少で、先島諸島の14世紀から16世紀頃までを代表する主要な道具である。骨製の篋はウシの肋骨や肩甲骨などを利用し、付刃したものである。何れも12世紀以降に導入されたウシの材を利用したものである。その他、装飾品として骨製の簪があり、登野城遺跡の2—7号人骨の頭部下より出土している。



登野城遺跡出土骨製品（尖頭器）



登野城遺跡出土骨製品（篋、簪）

D. 食糧残滓

食料残滓には貝類、魚骨、獣骨、炭化物などがある。貝類はアラスジケマンガイ、シャコガイなどの二枚貝、チョウセンサザエ、マガキガイ、サラサバティ、タカラガイなどの巻貝などで、浅海の砂底や潮間帯の岩場に生息し、比較的、容易に採集できるものが中心である。一方、獣魚骨類の出土も認められる。魚骨はリーフ内に生息するタイ科、ブダイ科、ベラ科などの量が目立つ。獣骨で注目されるのは、12世紀以前の遺跡には見られなかったウシの登場が特筆され、また、12世紀以降になりコメ・ムギ・アワなどの穀物類が確認されるようになる。「朝鮮人漂流民の琉球見聞記」の中には、与那国島、西表島など河川が発達した高い島では稲を中心とし、低い島では粟、黍、麦などが栽培されていたことや各島々での牛の飼育、牛糞を使用した肥料、与那国島での牛を使用した踏耕、更には種植から収穫までの時期などが細々と記されている（高崎 1971）。

②外来品

中国産の青磁・白磁は勿論、中国南部産の褐釉陶器の出土も多い。それは、ある特定の遺跡のみからではなく、八重山諸島内の各島々より同様の種類が多く認められる。特徴的なものを以下に記す。

A. 青 磁

青磁の中心は蓮弁文碗、雷文帯碗、無文外反碗、無文直口碗などの碗類が主体となり、稜花皿や腰折皿などと少し大きめの盤が伴う。これは名蔵シタダル海底遺跡と同様の傾向となっている。

出土量の分かる報告例をもとに、器種構成を把握したのが、グラフのとおりで、宮古島の砂川元島遺跡では、出土青磁は14世紀から16世紀に比定され、器種構成は碗が481点で全体の94%を占め、その中心となっている。皿や盤は28点の出土で全体の6%を占める。僅かながら杯が2点出土している。

石垣島の仲筋貝塚では、出土青磁類は15世紀中葉から15世紀後半に比定され、器種構成は碗が323点で全体の95%を占め、皿・盤は16点で全体の5%を占める。

石垣島の登野城遺跡は14世紀から16世紀に比定され、器種構成はやはり碗が85%と主となる（石垣市教委 2008）。

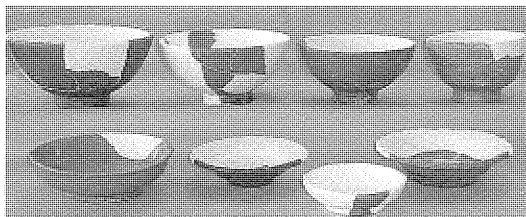
与那国島の与那原遺跡は14世紀から16世紀に比定され、器種構成は碗が129点全体の83%を占め、皿や盤は16点で全体の13%出土している。僅かながら香炉、杯、壺、瓶なども出土している（与那国町教委 1988）。

与那国島の慶田崎遺跡は14世紀から16世紀はじめに比定されている。器種構成は碗が326点出土で全体の90%を占め、皿や盤は32点で全体の9%出土している。僅かながら香炉、杯、壺、瓶なども出土している（与那国町教委 1986）。

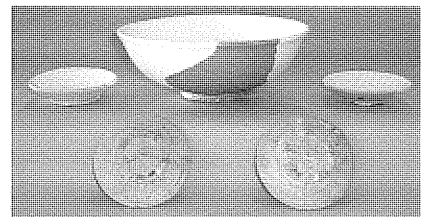
その他、名蔵シタダル海底遺跡で特徴的な遺物である顧氏銘や梵字印を押した青磁の碗皿を出土する遺跡は第a表のとおり13遺跡にも及ぶ。

B. 白 磁

白磁は14世紀から15世紀頃は無文外反碗が主体で、15世紀から16世紀にかけては、直口皿が主体となり、また小皿類の出土は20遺跡に及び、そのほとんどが割高台白磁小皿（挟り高台）で、かつ全釉タイプがほとんどである。青磁が碗中心であるのに対し、白磁の器種は小皿が多くなっているのが特色である。



登野城遺跡出土の復元青磁碗・皿



登野城遺跡出土の復元白磁碗・皿

C. 青 花

その他、名蔵シタダル海底遺跡で一定量出土している。青花の梅枝文・捻り菊文の碗皿を出土する遺跡もある。出土地は第 a 表の通り 1 跡である。

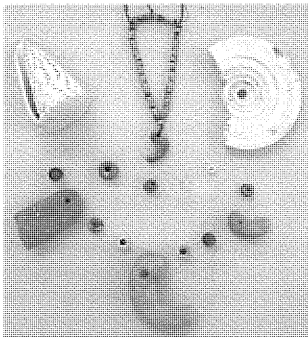
D. その他

その他、外来品には鉄器・鉄製品、勾玉・玉類、銭貨などがある。鉄器は、鉄鍋の破片や刀子、鋏、篋、鎌、フナ釘などがあり、鉄鍋片と農耕具が中心となる。石垣島の元桴海村（ヤマバレー）遺跡（ヤマバレー遺跡調査団 1980）（註1）、与那国島の与那原遺跡（与那国町教委 1988）、西表島の慶田城村（上村）遺跡（註1）

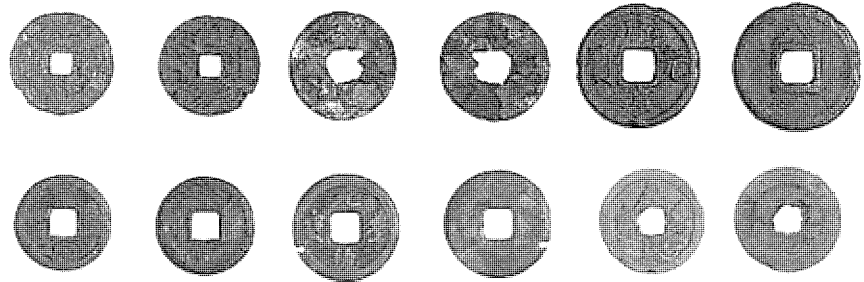
では、小鍛冶跡や道具が出土していることより、小鍛冶が行われていたと考えられる（沖縄県教委 1997）。「朝鮮人漂流民の琉球見聞記」の中で、鍛冶屋が居り、武器はなく、鎌、斧、小刀などが在ると記されており、専門職人の存在や農耕具が主であることが窺える（高崎 1971）。一方、石器組成を見ても12世紀以前まで主流利器であった石斧の出土量は極端に減り、砥石の出土量が増加することより、徐々に鉄器が主体に変化すると考えられている（大瀨永寛 2003）。

玉類や勾玉は12世紀以降より出土し、現在でも神司が厳正な祭祀のときに数珠玉や勾玉が使用されている。「朝鮮人漂流民の琉球見聞記」には、与那国島や新城島で男女に関わらず、耳、首、腕、足の飾りとして青珠をしていたことが記されており（高崎 1971）、登野城遺跡では2-8号成人女性の首や腕付近より玉類が、2-23号幼児骨の首周辺より勾玉及び玉類が一括出土している（大瀨永寛 2008）。これらは単純な土墳墓からの出土であり、性別や階級に関わらず身を飾っていた可能性が示唆される。

銭貨は北宋銭、南宋銭などが確認されている。殆ど単発的な出土で備蓄された状況での確認はない。



登野城遺跡出土装飾品



登野城遺跡出土銭貨

3. 遺構の特徴

①集落について

遺構は竪穴住居、掘立柱の建物、倉庫、墓、石垣、円形石組などがあり、集落としては2つの形態が認められる。それは石垣で囲まれた屋敷となる集落と石垣の伴わない集落との2形態である。

前者は複雑に組み合わさった屋敷囲いの性格の強い連廓野面石積み屋敷遺構を伴う集落である。代表的な遺跡として石垣島のフルスト原遺跡や富野遺跡、竹富島の新里村西遺跡、波照間島のブリブチ遺跡、マシユク村跡などがある（註1）。石垣島のフルスト原遺跡や波照間島のブリブチ遺跡は一辺に自然の障壁をうまく利用し、その上に広いところで幅2mから3mの野面積の石垣を積み上げている。フルスト原遺跡は15基の野面積の石垣が細胞状に張り巡らされて、14世紀から16世紀にかけ集落として使用され、近世には古墓や御嶽などとして利用される（石垣市教委 1977）。

また、ブリブチ遺跡内には遠見台とされる石垣が配置されている。

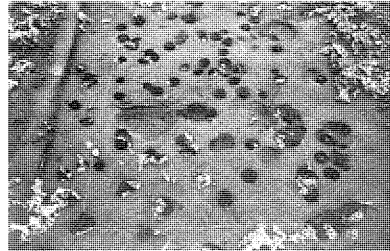
これらの遺跡は海上より見ると自然の障壁の上に野面積の石垣が巡っていることより、壮大な石垣となっている。より外への意識の高さが伺える。また、その規模も広範囲にわたり、かなりの労働力を費やして構築されたと考えられる。

複数ある石垣の機能については殆ど分かっていない。フルスト原遺跡では円形の住居址が確認され（石垣市教委 1977）、また、新里村西遺跡では平地式掘立柱建物跡と8本柱の高倉など複数の建物が建っていた

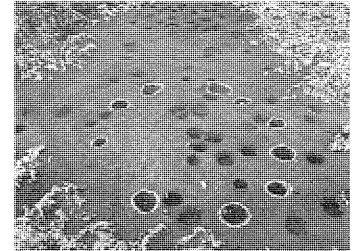
ことが確認されている（金武 1990）。「朝鮮人漂流民の琉球見聞記」の中では、与那国島での建物は、部屋はぶっ通しで、窓がなく、屋根の前方は軒が上り、後方はひさしが地にたれている。建物には筵を用いるとされ、家の前に穀物を蓄える倉があるとされており、新里村西遺跡での確認例は興味深い。また、便所がないとされ、また、その規模は新城島では民家40戸とされ、各地に存在した小集落の様相が窺える。



フルスト原遺跡第2号復元後屋シキ跡



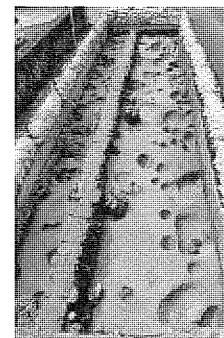
山原貝塚の平地式住居跡



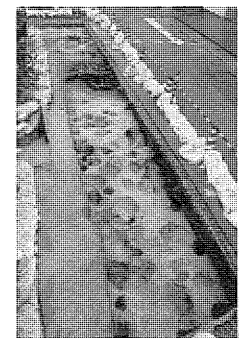
フルスト原遺跡の円形住居址

連廊野面石積み屋敷遺構の伴わない遺跡として、前述の石垣貝塚（石垣市教委 1993）、喜田盛遺跡（石垣市教委 2003）、平川貝塚（石垣市教委 1993）、登野城遺跡（石垣市教委 2008）が確認されている。何れも砂丘上に形成され、多数のピットと円形の石組施設、墓が伴うのが特徴である。

石垣貝塚では多数のピットが確認され、その中に円形の石組が等間隔に配置され、ピットの集中した箇所の外れには土壙墓、石組墓など複数の墓が確認されている（石垣市教委 1993）。また、登野城遺跡でも多数のピットが確認され、110～117グリットでは、東西に溝が走りそれを境とし、北側にピットが集中し、南側には多数の墓が確認されている（大瀨永寛 2008）。生活域と墓は比較的近接してはいるが、明確に区別された空間利用が確認されている。



登野城遺跡の状況①



登野城遺跡の状況②

②墓の変遷

12世紀以前の墓事情はほとんど分からないのに対し、12世紀以降より著しく土壙墓の確認例が増加する。その後、14世紀以降になると土壙墓のみでなく、岩陰墓や石組墓、石囲墓、石棺墓などの様々な墓が出現し、また、集団墓も見られるようになる。これらの時期や葬法のあり方は、中世九州社会との共通性があると指摘されている（瀬戸 2003）。

岩陰墓の調査例は少ないが、与那国島や石垣島の川平で通称「大和墓」と称される岩陰墓より、名蔵シタダル海底遺跡で確認されている15世紀から16世紀頃の貿易陶磁器が採集されている（大瀨永巨 1999）。「朝鮮人漂流民の琉球見聞記」の中には、与那国島では、死者は、棺桶に入れ崖下に置き、崖下が広いときは5・6棺桶を置くとあり、棺桶をともなった岩陰墓の在ったことが窺われる（高崎 1971）。

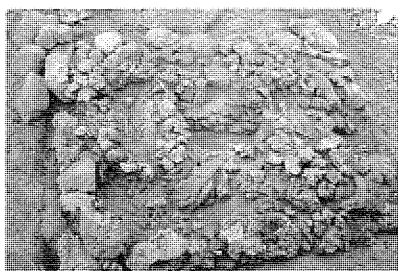
登野城遺跡の119グリットでは、3基の土壙墓が近接して確認されている。2-17～19人骨で、何れも頭位は北西を向く。2-17号幼児と2-19号成人女性の下歯の状況は遺伝的な特徴があり、より近親者の可能性が高いとされる（土肥 2008）。15世紀頃には近隣に複数を埋葬する習慣があったと考えられる。

また、前述の登野城遺跡では、石組墓や石囲墓のほか集団墓が確認されている。第2-4号人骨は成人男性で上部は方形に琉球石灰岩で囲まれた土壙に葬られ、テーブルサンゴの蓋が被さっていた。放射性炭素年

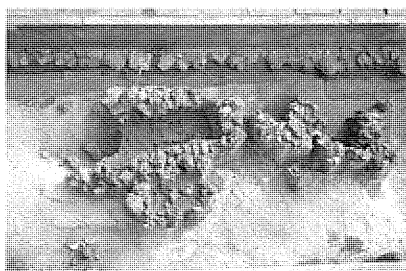
代測定の結果15世紀前後に位置づけられている。

第1-8号人骨と1-9号人骨は隣り合って埋葬された複数例である。1-8号人骨は成人男性で、墓の構造は、床面が礫敷で、周囲を方形に石組し埋葬域を作り埋葬されていた。上部よりイモガイ科の頂部を利用した円盤状の装飾品が出土している。その隣には、方形の石囲が追加され、1-9号人骨と一緒に葬られていた。両者の時間的な関係は不明であるが、放射性炭素年代測定の結果15世紀中ごろの年代が得られている。

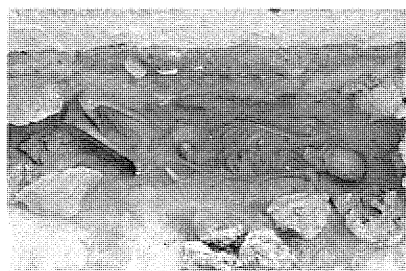
野底崎の裾野の琉球石灰岩上に方形石積墓が5基確認されている。その内の第1号方形石組墓は、平成14年の確認調査の際に調査が実施されている。墓は長軸6m、短軸5.5mの長形状、高さ50cmで、縁石は直径50~100cmの大きな凝灰岩や琉球石灰岩が利用され、方形に囲まれていた。その内部は琉球石灰岩を利用し方形石組を3箇所組み合わせ埋葬域を「H」状に配している。その中にそれぞれの被葬者が珊瑚砂利により埋葬されていた。埋葬域の切合より最も中央部が古い。また、中央脇の2つにはテーブルサンゴの蓋が被さっていた。中央の上部より、青磁雷文帯碗、青花碗などは完形で、褐釉陶器壺が3つ潰れた状況で一括し入っていた。青磁及び青花碗は名蔵シタダル海底遺跡で確認されている類のものである。詳細は第2章の関口広次氏報告を参照されたい。出土遺物より、15世紀後半から16世紀初頭の墓と考えられる。この手の墓は石垣貝塚でも確認され、石垣貝塚では火葬の痕跡が認められている（石垣市教育委員会 1993a）。



野底崎遺跡第1号石組墓



登野城遺跡の石組墓と石囲墓



登野城遺跡の石囲墓

まとめ

「ブスヌヤー・ブシンヤー」、「ブスヌヤマ」、「ブスヌヤシキ」や大和墓と称される場所や、稲が安南より持ち込まれたという伝承が先島には残り、考古学的にも12世紀以降は、多くの外来文物の流入が認められる。当初は徳之島産のカムイヤキが主要遺物の一つであることより、北からの往来が想定されるが、14世紀から16世紀にかけてはより膨大な量の中国産の貿易陶磁器が出土しており、外来品の流入は中国産の貿易陶磁へと大きな転換を迎える。その頃、遺跡数は増加し、その立地場所も八重山諸島の各島々において海岸低地砂丘や海岸近くの展望の利く小高い丘、緩やかな傾斜地、丘陵の先端部、海へ張り出した岬など多岐にわたる。島々のとくに海への展望の利く場所に、遺跡が立地することが多く、それは遠見台や狼煙台的な役割を持ったものとも想定され、交易形態に起因したものと考えられる。

集落形態は、道路がなく、通用門で結ばれた連廓野面石積遺構が不整合に組み合わせさせた独特の集落と、そうした連廓野面石積遺構を伴わない集落の2つがある。フルスト原遺跡やブリブチ遺跡など連廓野面石積み屋敷遺構を伴った集落は、海側に自然障壁を利用し、野面積の石垣を設け、内陸側の石積み幅は、比較的、狭くなっている。14世紀から16世紀の一時期において石積の登場や展望の利く遺跡の立地などは海からの来訪者に対する村々の意識の高まりが強くと考えられる。それは石垣が登場するのが北は今帰仁から南は八重山までほぼ同時期である14世紀であり（金武 2003）、ほぼ同時期に沖縄諸島から先島に至る地域において共通したものであったと考える。

また、フルスト原遺跡の石垣の規模が15基で12haの広範囲に広がり、根石幅は広いところで2mもあることを考慮すると大きな労力が費やされたと想定される。

さらに、12世紀以降に土壙墓の確認例が顕著となり、14世紀から16世紀にかけては大型の墓の出現が認められる。墓は被葬者を後世の人々がその人を思い、葬るものである。当時の埋葬用石材の調達や墓の構築規模から見て、より大掛かりな作業を要する墓が出現しており、その一部は集団墓として発展している。このことは、村落内での相互関係の繋がりの一層の強さが増したこと、また集団内で尊敬を集めた人々の出現があったことなどが想定される。

一方、同時期の陶磁器の量は前後の時期に比し爆発的な出土を見せる。青磁は碗が9割以上と中心で、そこに皿や盤が少量伴う形となり前述の第2章で関口広次氏が示したとおり、名蔵シタダル海底遺跡と同様の組成となる。また杯、壺、香炉、瓶なども少量入ってきている。白磁は無文外反碗や直口皿があるが、中心は皿で、なかでも割高台白磁小皿がほとんどである。

このような貿易陶磁器は、点在する八重山諸島の島々のある一定の場所から出土するのではなく、島々の至る遺跡から出土する。14世紀以降に中国福建沿岸海商らによる北進交易のルートの一つの拠点として開始されて以降、15世紀から16世紀にかけては中国産の貿易陶磁器の流入量は遥かに主体となり、より八重山諸島と大陸間の頻繁な民間交易が主体的に行われていったと考えられる。膨大な量の貿易陶磁器の流入が認められるのに対し、大型の船が接岸できるような港といえる規模の施設をもった遺跡は存在していない。その交易は港等の施設が整っていないことより、前述した展望の利く遺跡でもある島々の拠点近くの沖合に廻航してきた中国私船との間で、特殊な交易の方法がとられていたであろう。その方法の一つに大瀆永亘が指摘するように、海からも見える展望の利く高所から交易私船に合図を送り、小船で中国私船まで出向き、船上交易していたと考えられる。またその際の交易には、八重山の島々に産出する交易産物と中国の貿易陶磁器との物々交換が主と考えられる。

その他、鉄製品や勾玉・玉類なども流入したと考えられ、鉄鍋の丸底状で口縁部が外反するものは土器文化に大きな影響を与えたと考えられる。また、勾玉や玉類は今でこそ特殊な人々のみに使用され、伝えられているが、登野城遺跡での単純な土壙墓からの出土状況は、かつては誰もが装飾品として趣向使用していた観を受ける。

これらの外来文物は在地品にも大きな影響を与えたと考えられる。土器文化が新たに12世紀以降より登場し、それはこれまで土器製作を経験していなかったとは考えられないほど精巧なまでの土器を作り出し、14世紀から16世紀にかけては種類が鍋形・壺形・鉢、碗、皿など多彩になり、最盛期を迎えている。形態は、その祖形が外来品である鉄鍋やカムイヤキ壺、褐釉陶器の壺の影響を受け製作された可能性が高いと考えられる。また、12世紀以降になり農耕・家畜が導入され、ウシは食のみに関わらず、農耕に関して大きな役割を果たしていたと考えられる。

更に貝製品は漁労具に関するものが多く、遊具や装飾品が認められ、骨製品は尖頭器が先島を代表する遺物として認められた。

遺跡の立地や遺構などより外来者への意識の高まりが感じられる一方、遺物の中に本島のグスク等で確認されている鎌、火矢、刀、弾丸、石弾、鎧、兜などの武器・武具（上原 2003）の類が殆ど確認されていないのは注目され、それは本島のグクス遺跡と大きく異なる点である。

以上、14世紀から16世紀と言う時期は、先島文化圏の歴史の中で大きくそして急速に時代が変化した時期と

位置づけられる。それは外来文物を多く取り入れる一方で、在地の環境を利用し、その一部は12世紀以前の伝統を引き継ぎ多様・複雑化した独自の文化を築いたと考えられる。先島の特徴である連廓野面石積遺構や骨製尖頭器などの存在は、先島が独自の経済圏を築いていたことを示唆しているであろう。それは一つに琉球列島の最南端に位置し、大陸に最も近い地理的な位置が、大きな役割を担っていく要因となったと考えられる。

しかし、16世紀以降は忽然と途絶える遺跡が多くあり、文献上で記されるオヤケアカハチ・ホンカワラの乱が大きな転機となっていると考えられる。16世紀頃まで自由奔放に行われていた中国福建沿岸海商らとの私貿易・密貿易は漸減し、各地に点々とあった集落の統治が円滑に行われ集落の再編成・統合がなされていくと考えられる（大瀨永亘 2006）。

謝 辞

最後になりましたが、本文を作成するに当たり、大瀨永亘、関口広次、谷川章雄、大田静男、下地傑、石垣市教育委員会の方々に御指導・御助言・御協力頂きました。

とくに関口広次先生には現地調査の際の資料収集の視点・方法から本文の編集に至るまで細かく御指導・御助言頂きました。また、大瀨永亘先生には先島の遺跡について文献・伝承を取り入れた捉え方、これまでの蓄積された資料について多く御助言・御指導頂きました。文末ながら各位に感謝申し上げます。今後の八重山考古学の研究の進展を願いたい。

第a表 主要陶磁器の出土数

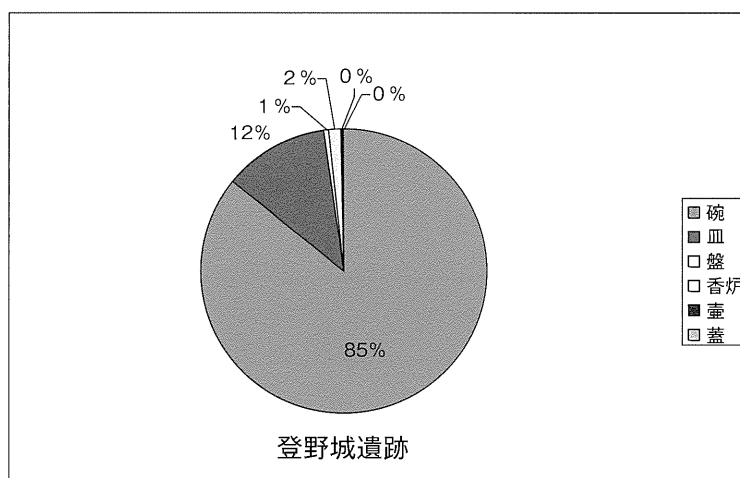
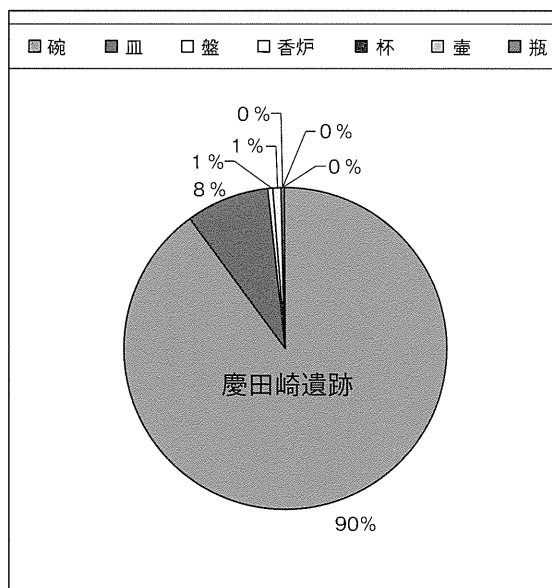
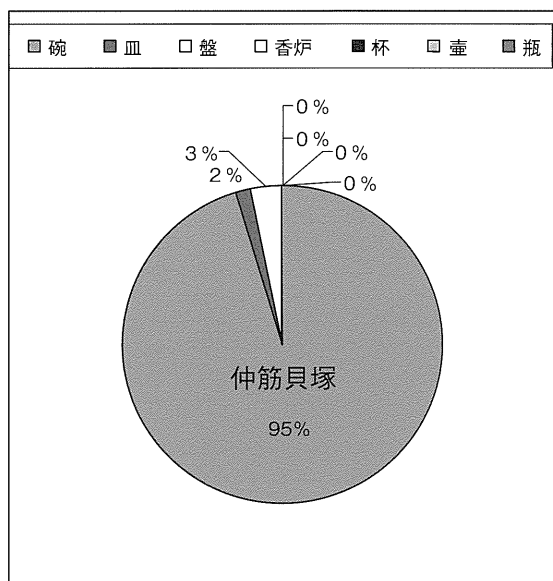
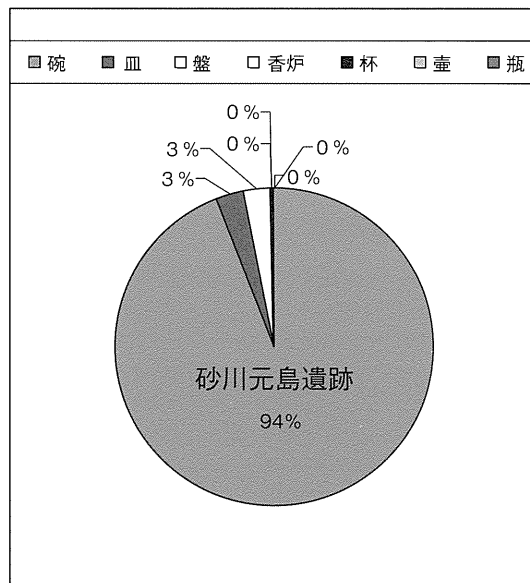
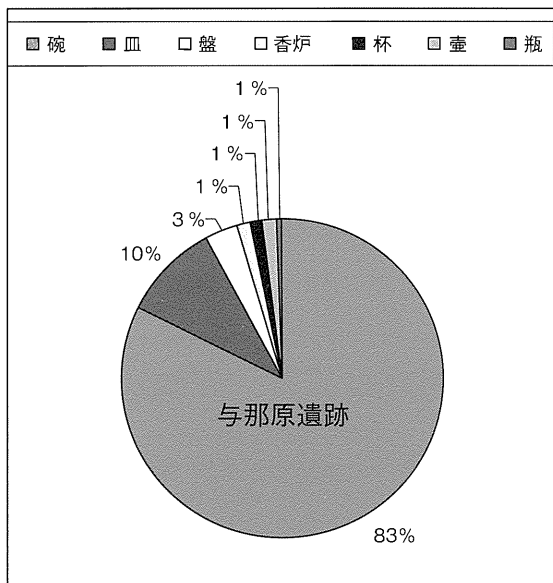
No.	遺跡名	県	所在地	類似品					年代
				青磁		青花		白磁	
				願氏銘	梵字印	菊枝文	捻り菊	小皿	
1	住屋遺跡	沖縄県	宮古島市平良字宮里	5		1		2	15c前半~16c
2	根間・西里遺跡	沖縄県	宮古島市平良字西里					2	
3	尻並遺跡	沖縄県		1	1				15c前半~中頃
4	砂川ウイビヤ遺跡	沖縄県	宮古島市城辺砂川	3					
5	砂川元島遺跡	沖縄県	宮古島市城辺砂川	5					14c~16c
6	宮国元島遺跡	沖縄県	宮古島市上野					1	
7	元桴海村遺跡	沖縄県	石垣市字川平	1	1			2	14c~17c
8	仲筋貝塚	沖縄県	石垣市川平					1	14c~16c
9	フルスト原遺跡	沖縄県	石垣市字大浜		1				15c
10	喜田盛遺跡	沖縄県	石垣市字新川					6	15c~16c
11	平川貝塚	沖縄県	石垣市字石垣平川	1				6	
12	石垣貝塚	沖縄県	石垣市字石垣					10	15c後半~
13	八重山蔵元跡	沖縄県	石垣市字登野城					6	15c後半~
14	カイジ浜遺跡	沖縄県	竹富町字竹富					1	15c~16c
15	花城村跡遺跡	沖縄県	竹					1	14c中頃~
16	成屋遺跡	沖縄県	竹富町西表成屋					・	14c~18c
17	与那良遺跡	沖縄県	竹富町西表島与那良					3	14c~17c
18	慶来慶田城遺跡	沖縄県	竹富町西表	1				1	
19	慶田城村遺跡	沖縄県	竹富町西表祖納	1				1	15c~16c
20	西表東部ピニシ海岸	沖縄県	竹富町西表	1	1			1	
21	西表島東部ミチャリ	沖縄県	竹富町西表		1				
22	中森貝塚	沖縄県	竹富町鳩間島字鳩間		2			1	
23	マシユク村跡遺跡	沖縄県	竹富町波照間島					1	
24	与那原遺跡	沖縄県	与那国島字祖納	1	1			1	14c~16c
25	慶田崎遺跡	沖縄県	与那国島字与那国					1	14c~16c初
合計				20	8	1		48	

第b表 主要遺跡の陶磁器の器種別割合

※名称及び年代は、文献を加味して設定した

遺跡名	県	所在地	青磁							年代
			碗	皿 (小~中)	盤 (大)	香炉	杯	壺	瓶	
砂川元島遺跡	沖縄県	宮古島市城辺砂川	481	14	14		2			14~16世紀
仲筋貝塚	沖縄県	石垣市川平	323	6	10					14~16世紀
与那原遺跡	沖縄県	与那国町字祖納	129	16	5	2	2	2	1	14~16世紀
慶田崎遺跡	沖縄県	与那国町字与那国	326	30	2	3			1	14~16世紀初

各遺跡出土青磁の器種構成



[註一覧]

1. 各遺跡名は『八重山島年来記』『八重山嶋由来記』に記載された名称や地元で呼ばれている名称に統一し、報告書名は（ ）で表記した。
2. 平成13年から14年にかけて行われた範囲確認調査で、砂丘部でピットや土壙墓が確認されている。時代は15世紀から近世に属す。

[参考文献]

- 石垣市教育委員会 『フルスト原遺跡』石垣市文化財調査報告書 第1集 1977
- 石垣市教育委員会 『石垣貝塚－県道真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書 第17号 1993 a
- 石垣市教育委員会 『平川貝塚－県道真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書 第18号 1993 b
- 石垣市教育委員会 『喜田盛遺跡－真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書 第28集 2004
- 上原 静「武器・武具の様相」『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』2003 沖縄県教育委員会
- 大瀨永亘『八重山の考古学』1999 先島文化研究所 自費出版
- 大瀨永亘『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』2006 先島文化研究所 自費出版
- 大瀨永亘「八重山諸島の交易－スク文化期を中心に」谷川健一編『日流交易の黎明－ヤマトからの衝撃』2008 森話社
- 大瀨永寛「八重山諸島の石器」『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』2003 沖縄県教育委員会
- 大瀨永寛「遺構」『登野城遺跡－真栄里新川線街路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書－』石垣市文化財調査報告書 第30集 2008
- 沖縄県教育委員会『カンドゥ原遺跡発掘調査報告書（1）排水溝に伴う緊急調査』第49集 1983
- 沖縄県教育委員会『カンドゥ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査』沖縄県文化財調査報告書 第58集 1984
- 沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ－八重山諸島の道一』1990
- 沖縄県教育委員会『西表島－上村遺跡－重要遺跡確認調査報告』沖縄県文化財調査報告書 第98集 1991
- 沖縄県教育委員会『西表島・慶来慶田城遺跡 重要遺跡確認調査』沖縄県文化財調査報告書 第131集 1997
- 金武正紀「遺構」沖縄県教育委員会『新里村遺跡－竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書 第97集 1990
- 金武世紀「先島の歴史時代」『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』2003 沖縄県教育委員会
- 瀬戸哲也「グスク時代の土壙墓・石組墓－発掘資料から－」『紀要 沖縄埋文研究』2003 沖縄県立埋文センター
- 高崎彰「李朝実録より見た15世紀末の南西諸島・先島社会」（『第10次沖縄八重山調査隊－与那国島調査報告書』1971 早稲田大学アジア学会
- 高宮廣衛「Ⅲ 古墳文化の地域的特色」編者近藤義郎・藤沢長治「11 沖縄」『日本の考古学Ⅳ 古墳時代（上）』1967（3班発行）河出書房

土肥直美「登野城遺跡出土人骨について」『登野城遺跡』石垣市文化財調査報告書 第30集 2008

鳥居龍蔵「八重山の石器時代の住民に就いて」『太陽』第11巻 第5号 1905

仲筋貝塚調査団（代表大濱永巨・関口広次・谷川章雄・中沢富士雄・阿利直治・牛沢百合子）『沖縄・石垣島仲筋貝塚発掘調査報告』1981

ヤマバレー遺跡調査団代表三上次男・田村晃一『沖縄・石垣島一ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報』1980

与那国町教育委員会『慶田崎遺跡－久部良小学校体育館建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』与那国町文化財調査報告書 第1集 1986

与那国町教育委員会『与那原遺跡－個人農家の畑地改良等に伴う緊急発掘調査報告書』与那国町文化財調査報告書 第2集 1988